《新刊紹介》

藤原与一先生著
「私の国語教育学」

藤原与一先生の「国語教育学」は、どのような立場からの、どのような目的・内容・方法・体系から成立しているのであろうか。そして、既出の「国語科教育学」「国語教育学」「言語教育学」を志向した試案・試論とどう異なっているのであろうか。

先生は、**序説　私の国語教育学**（―国語教育学への思慕）で、「倫理と愛情とにつらぬかれた教育作用のいること、またその認識のいること」（11ページ）を強調され、言語倫理観をよりどころにされた「教育倫理学」のささえのもとに、「国語学・国文学を根基とする国語教育学を考えたい。その、国語学国文学の根基は、一元的に、国語学的根基に深められるかと思う。」（13ページ）として、国語教育学のために、専門学の根拠の必要を説かれ「私は、方言研究によりつつ、単純な国語学的見地には引かれないで、いわばこだわりなしの見地で、国語教育学の根基を言おうとする。」（14ページ）と、お立場を述べていられる。

この序説をうけて、本論が、前・後編、全十章から成っている。

〔前編〕学問原理

第一章　基礎の学
第二章　国語表現の学とその構造
第三章　抑揚論
第四章　意味論
第五章　国語教育学の動的基底

〔後編〕指導原理

第六章　国語教育感覚
第七章　作文の原理と作文教育の原理
第八章　読解の原理と読解教育の原理
第九章　「話す」の原理と「話す生活」教育の原理
第十章　「聞く」の原理と「聞く生活」教育の原理

国語教育の学問原理として、一元的な国語国文の学、すなわち国語表現の学を求められた先生は、その表現の学の力学的な構造として、抑揚論と意味論の二つの柱を見い出され、「国語表現の学が、『抑揚論＋意味論』の構造をとることによって、国語教育学は、動的な体系となりうるであろう。」（28ページ）と先生独自な国語教育学探究の到達を述べられ、両者の相互関連による動的基底に即して、実践原理、すなわち後編の国語生活指導の指導原理が展開されている。

結章　国語教育研究無限　では、抑揚観による人間教育・心のことば・論理的明確の三点を強調された後、「これの発表にのぞんで、今のきわにまた、私は、改稿を思うことしきりである。まことに、国語教育研究無限との感が深い。」（240ページ）と結んでいられる。

日々、国語教育・教室実践にたずさわる私どもは、先生にどうおこたえしていくか。覚悟をあらたにしなければならない。

（昭和49・6、新光閣刊、A5判　二四九ページ、二〇〇〇円）

（白石寿文）